知の拠点

京都大学人文科学研究所

研究所がめざすもの

人文科学研究所では、創立以来、古典文献の精密な読解や同時代資料の詳細な分析、現代社会のきめ細かいフィールド調査など、多方面にわたる研究を続けてきました。通り一遍の「常識」に照らせば大雑把に扱ってもかまわないように思われる人と人との関係性は、それぞれ微妙な差違を持ち、その差違を交流のエネルギーに変換することによって、政治や経済、宗教や思想、文学や芸術、さらには娯楽から消費に至るまで、あらゆる活動の原動力となっているからです。

連動する現象に対して連携して取り組む――共同研究の醍醐味もまた、人と人との関係性が生み出す知的興奮と言えるかも知れません。現在、その範囲は着実に厚みと広がりを増しており、公募型共同研究や国際共同研究も、もはや珍しくなくなってきました。それらの成果を広く一般に公開し、大勢の方々からご意見を賜ることも、「終わりの始まり」として次の研究テーマを考えていく上で欠かせません。

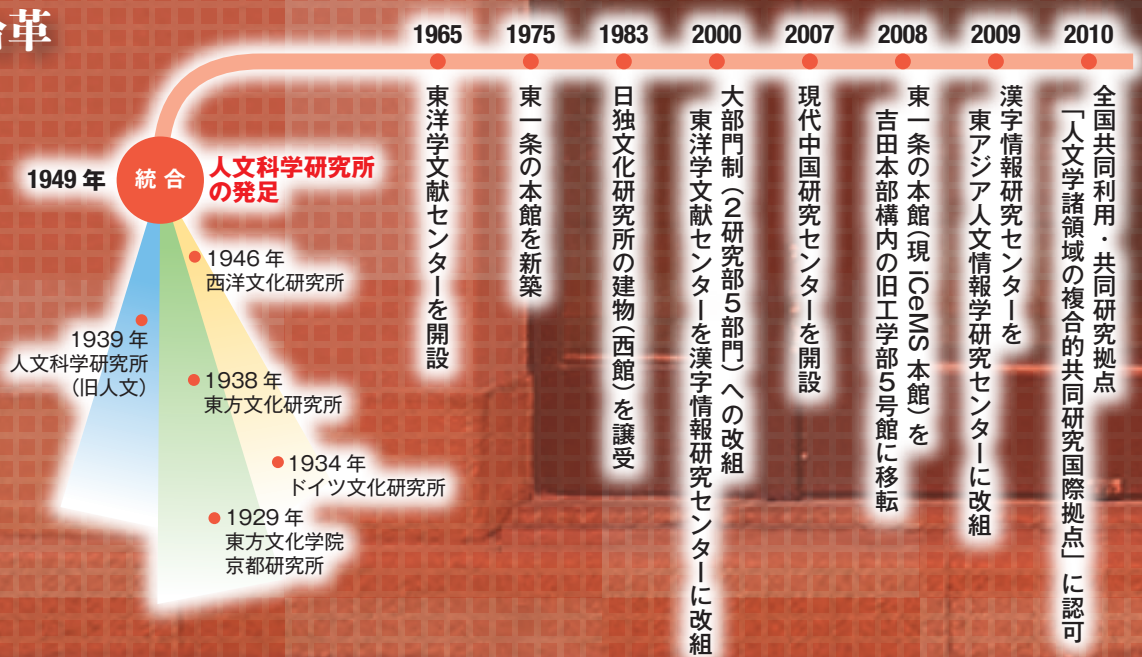
科学技術の急速な発展は、技術それ自体の進歩として自己完結し、もはや人と人との関係性には無縁の事態とみなされ、効率化に伴う利便性の拡大にのみ関心が寄せられているように見えます。しかし技術開発もまた社会のあり方に連動する現象である以上、人と人との関係性に即して考えないわけにはいきません。それをなおざりにしたためにどれほど取り返しのつかないことが起こったかについては、改めて述べるまでもないでしょう。

技術の進歩は言うまでもありませんが、自然に対する考え方も大きく変わりましたし、社会のあり方も、均質化が進む分だけかえって独自性の主張が高まるというように、決して単純ではありません。こうした状況に鑑みれば、たとえ以前と同じテーマを取り上げたとしても、まったく異なる結論が出て来ることも大いに考えられます。一度取り上げればそれで用済みになるような使い捨てのテーマなど、じつは一つもないのです。

共同研究をはじめとする人文科学研究所の諸活動は、決して大向こう受けするようなものではありませんが、ヴァルター・ベンヤミンの次のような言葉をよすがとして、今後も粘り強く研究を続けていきたいと考えています。

「意見は、社会生活という巨大な機構にとって、機械にとってのオイルにあたる。ひとは、タービンの前に立って機械油を浴びせたりはしない。隠されたリベットや継ぎめに、少量のオイルをさすものである。そのリベットや継ぎめを、ひとは熟知していなくてはならない」(『一方通交路』)。

沿革



組織図

- 五つの研究部門、二つの附属研究施設、図書室、事務部を置く
- 全国共同利用・共同研究拠点（人文学諸領域の複合的共同研究国際拠点）
- 外部委員が半数以上を占める運営委員会、共同研究委員会を設置

所長・副所長

研究部門

人文学研究部
- 文化研究創成研究部門
- 文化生成研究部門
- 文化連関研究部門

東方学研究部
- 文化表象研究部門
- 文化構成研究部門

事務部
- 総務掛
- 図書掛
- 東アジア人文情報学研究センター事務掛

附属研究施設

東アジア人文情報学研究センター

1965年4月に附置した東洋学文献センターは、社会の急速なIT化に即応し、漢字情報研究センターを経て現センターにグレードアップしました。漢籍関連事業を発展的に継承しながら、人文学に情報学的な手法を取り入れ、言語コーパスや汎用データベースの構築に関する文理横断的な研究を推進しています。

現代中国研究センター

現代中国研究を重点的に推進するために、2007年4月に設置しました。日常的に共同研究班活動を活発に行い、若手研究者の養成および国際的な交流の拠点としても機能しています。また、研究基盤充実のために「現代中国情報資料集積基地」を設け、新聞・雑誌などの関連資料を収集し、整理を進めています。

研究所の特徴

知の探索　フィールドワークの伝統

これまでの文献学を超えて、人文研が人文科学をさらに深化させているのは、フィールド調査によって未知の文化社会を発掘し、新しい学問の方法を切り拓いてきたからです。

“探検大学”とも呼ばれる本学の伝統は、中国石窟寺院の考古学的な調査にはじまりました。なかでも1938年から7年間にわたって継続された雲岡石窟の調査は、わが国における組織的な海外学術調査の草分けとなりました。

戦後に英語と日本語で出版された33冊の報告書は、国外でも高く評価され、いま中国語版を編集しています。戦後はまた、中央アジア、南アジア、西アジア、ヨーロッパへと調査の対象地域を広げ、人類学や社会学、宗教学、言語学などさまざまな分野で学術調査を展開しています。

とくに近年では、海外の研究機関や研究者たちと国際的な共同プロジェクトを組織し、土に埋もれた考古資料のほか、民間に伝わる未知の文書の発掘にも取り組んでいます。

そうした有形・無形の文化遺産について、国境と分野を越えた共同研究を進めることにより、私たちは新しい知の地平を開拓しているのです。

知の協働　共同研究の醍醐味

創立以来、共同研究は、人文研の中心に据えられている知のあり方です。ここには、これまで国籍を問わず多くの人々が集い、言葉を交わし、新しい学問を求めてきました。つまり、共同研究は、同時代人たちとの対話の場所といってよいでしょう。

また、それは「死者との対話」の場所でもありました。遠い過去に荼毘に付された著者の書き遺したものを、月に２回から４回、班員と一緒に読んでいくというスタイルも、いまなお人文研の基本的な知の手法のひとつです。

近年は、全国共同利用・共同研究拠点として、企画や班員の公募を行い、これまでの人文研スタイルを広く社会に開き、議論するという新しい課題に挑戦しつつあります。

人文研の共同研究が、科研費の研究と大きく異なる点は、その頻度、班員同士の密接な交流だけではありません。あるいは、安易な妥協を認めず、個々の違いを尊重する態度ばかりでもありません。一言でいえば、それは着実かつ創造的な知の伝達です。私たちが「死者」となったあとも見越して、次世代にも知の基礎、知の方法を伝えていくことを使命と考えています。

数字でみる人文研

共同研究拠点として
年間約 25 件の研究班を運営
（公募型研究 50%　学外班長 5 件）

共同研究への参加者は年間 1 万人
正規班員は 500 人
（学外研究者 65%　院生・ポスドク研究者 100 人）

年間 30 人の外国人研究者　60 人の PD・研修員等を受け入れ

研究所主催のシンポジウム／講演会／ワークショップ／セミナーなど
年間 400 件のイベントを開催
その参加者は　研究者向け企画 7,500 人　一般向け企画 3,000 人

図書 61 万冊　雑誌 9,500 種　学術資料 16 万点を所蔵

和書 17 万冊　洋書 9.3 万冊、
漢籍・中国書 34.7 万冊

和文 5,150 種　欧文 1,690 種、
中文 2,450 種　朝文 210 種

考古 10 万点　中国石刻 1 万点、
中国・台湾絵画 7,200 点　地理民俗 3.75 万点など

図書室の利用者数は
年間 6,000 人

電子複写サービスの利用者は年間 705 人
利用料は総額 543,677 円

＊2010-2014 年度の平均値

WEB 上で提供するデータベースの年度別アクセス数は
拓本文字 DB 14,505,978 件　全国漢籍 DB 3,809,458 件

＊2010-2015 年度の平均値

アクセス

本館（吉田キャンパス・本部構内）
〒606-8501　京都市左京区吉田本町
TEL　075-753-6902
FAX　075-753-6903
http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp

分館（東アジア人文情報学研究センター）
〒606-8265　京都市左京区北白川東小倉町47
TEL　075-753-6997
FAX　075-753-6999
http://www.kita.zinbun.kyoto-u.ac.jp

本館外観

本館ロビー

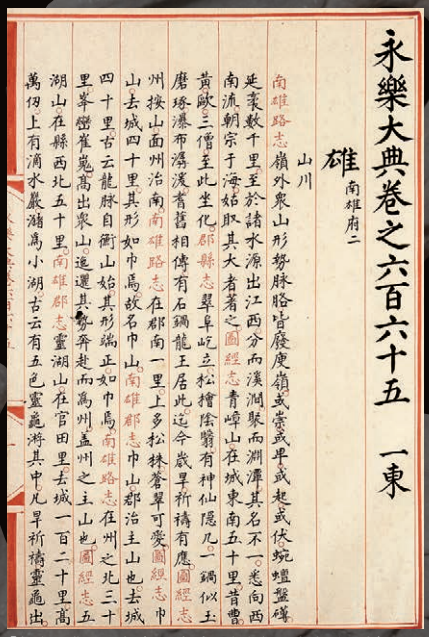
分館外観

分館ロビー

古典籍・考古資料

京大人文研「知

歴史や文化を切り拓く叡智を
学問的探究心を羅針盤に　時

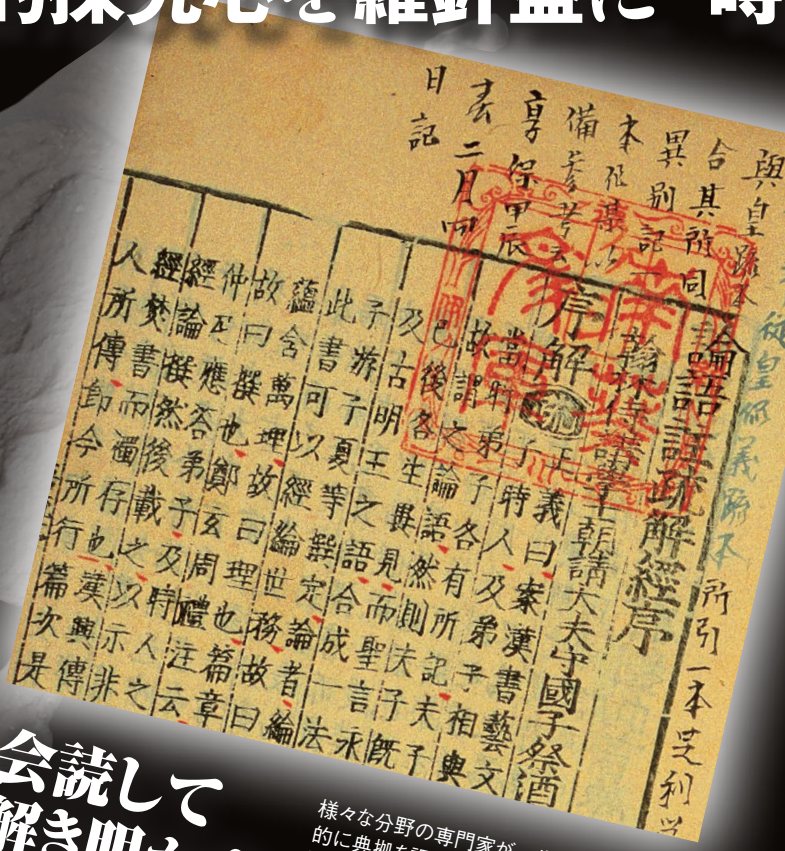


『永楽大典』零本（明　嘉靖・隆慶年間内府重写本）

分館の書庫に配架されている漢籍は、「四部分類」とよばれる中国式の図書分類法にもとづいて管理されています。前身の東方文化研究所が蒐集した 97,272 冊の漢籍を受け継ぎ、現在では約 24 万冊（本館別置分を含む）の蔵書数を誇ります。

Antoine-François Prévost (éd.), Histoire générale des voyages, Paris, Didot, 1748-1789, 20 vol.

アベ・プレヴォ編の『旅行記大全』初版全 20 巻の初版本。大航海時代以来のヨーロッパ人の各地への旅行記を地域別・年代別に総覧。国際通商と植民地の発展とともにはじめて「世界」を意識した 18 世紀ヨーロッパの外へのまなざしを伝えています。なお、研究所では、1815 年以前に出版され、資料的価値の高い洋書について、貴重書として本館書庫内に別置し、禁帯出の扱いをしています。



会読して解き明かす

様々な分野の専門家が一堂に会して、徹底的に典拠を調べ上げて原書を読み解き、多彩な議論の華を咲かせます。昔人の叡智に触れて新しきもの、語り継ぐべきものを知ることに、学問探究の妙味と真髄があります。

文物を探偵する

文明の十字路といわれるガンダーラ。その仏教寺院址で発掘された石彫の一部は、パキスタン考古局との協定によって持ち帰り、さまざまな角度から解析を進めています。

牛骨や亀甲に刻まれた中国最古の文字が甲骨文です。人文研には河南省安陽殷墟から出土した 3,600 片近い甲骨が収蔵され、最先端の漢字研究を進めています。

ガンダーラ仏教寺院址の発掘品

」の冒険 示意図

未来社会に語り継ぐために
を超えた「知」の冒険に出る

探す 見つめる 集める 繋ぐ

『閩版十三経注疏』山井鼎手校本

変わる中国、変わらぬ中国

中国近現代史の研究班では、前近代史研究とも連携しつつ、多様な側面から近現代の激動期における中国の変容を追うとともに、長い歴史の中でも変わらない中国のさまざまな「制度」を探求しています。

100年前の惨劇からいまを問う

第一次世界大戦の総合的研究

人文書院のレクチャーシリーズ（現在12冊）、岩波書店の『現代の起点　第一次世界大戦』（全4巻）などを通じて研究班の成果を世に問いました。

今日なお、私たちが第一次世界大戦によって出現した世界システムから決して自由にはなっていません。世界内戦、感性の変容、戦争の暮らしへの侵入、など、冷戦の時代に蓋をされてきたような問題が、いま再び亡霊のように現れてきています。100名を超える参加者のもと、8年かけて共同研究を続け、多くの成果を出すことができました。

みやこプロジェクト

学問文化の拠点として「みやこ」で営まれてきた明治以来の学術資源を集めて研究し、社会に発信していきます。京都における社会運動・農業経済の資料、日仏間の文化交流関連資料、京大に遺された美術作品、桑原武夫・梅棹忠夫等の研究アーカイブなど。

磨く 編む 読む 極める

生きること、考えること

環世界の人文学

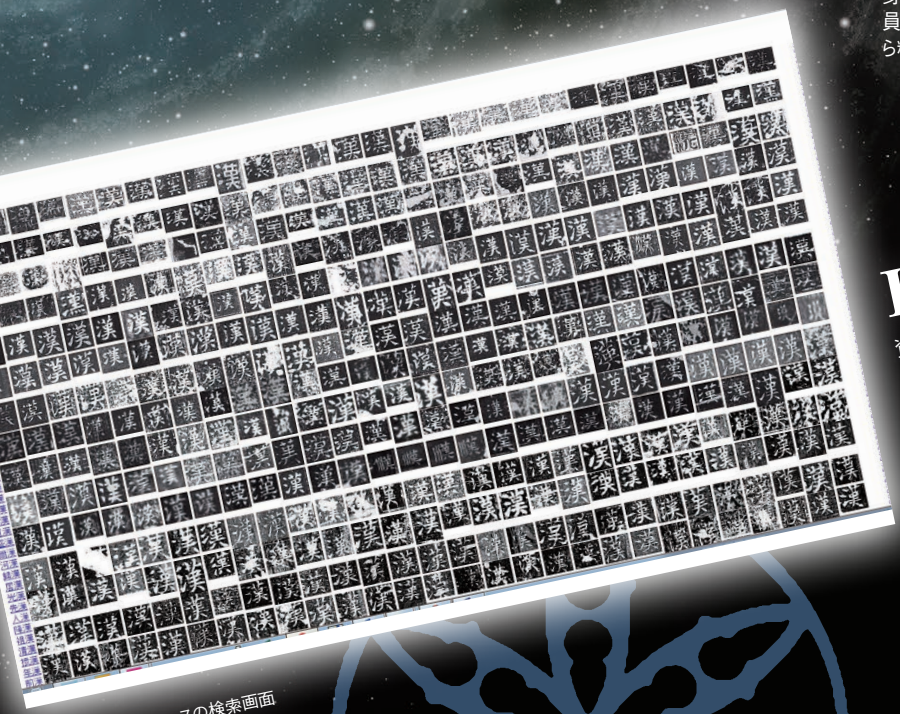
「生きもの」にとって「生きる」とはいったいどういう営みなのでしょうか。人間を、人間だけではなく、人間以外の「生きもの」、いいかえればその輪郭や境界から捉え直すことによって、かえってより深く人間の「生きること」を理解することにつながるのではないでしょうか。本研究の根底にあるのはそのような問いかけです。

ガンダーラ仏教寺院址出土の涅槃図

五感をつかって学ぶ

文化人類学

今西錦司や梅棹忠夫の活躍はいうまでもなく、人文研はフィールドワークの長い伝統をもっています。フィールドワークの醍醐味は、身体をまるごと使って学ぶこと。普段の「常識」とは異なる論理を発見し、世界を複眼的にみる思考を身につけることです。人文研では、人類学を専門とする所員が世界各地にフィールドワークに出かけ、軍隊の研究から精霊祭祀の調査まで、幅広い研究を行っています。



拓本文字データベースの検索画面

IT時代の人文学

資料のデジタル化によってパソコンを用いた横断検索や情報処理が容易に行える時代になりました。そこで、情報学の専門家と文献学者がタッグを組んで、新しい研究方法の開発に取り組んでいます。同時に、伝統的な文献考証の手法も大切にし、貴重な典籍に永続的な生命エネルギーを注入したいと考えています。

知の交流と醸成

漢籍学への誘い

毎年、漢籍整理に携わる図書館職員等を対象とする初級・中級の講習会を実施し、漢籍学・漢字文化に関する一般公開セミナー「TOKYO 漢籍SEMINAR」「高校生のための夏期セミナー」など）を開催しています。

民知への問いかけ
研究成果を社会につなぐ

人文研アカデミーの挑戦

レクチャー・コンサート、キッチン・トーク、文学カフェ、古典再読などカルチャーセンターとは一味違う人気講座です。大学の外で人文研の知を鍛錬すべく、私たちは直球勝負で挑みます。

知的財産の恒常的な発信

共同研究の成果は『漢簡語彙 中国古代木簡辞典』や『現代の起点　第一次世界大戦』など多くの新知見に満ちた著作として刊行されています。定期刊行物には『東方学報』『人文学報』欧文『ZINBUN』などがあります。

多元的な国際学術交流

数多くの外国人研究者を積極的に受けいれて濃密な国際学術交流を行うとともに、国際シンポジウムなどを開催することによって研究成果を広く世界に発信しています。

人文研創立 80 周年記念講演会（2009 年 11 月 5 日）